



追悼

秋元波留夫先生を悼む

国立精神・神経センター名誉総長
高橋清久

秋元波留夫先生は2007年4月25日、101歳の生涯を終えられた。精神医学・医療・福祉の広い分野における重鎮として、また象徴的存在であった。まさに、巨星墜つという想いでいっぱいである。私は1964年、東京大学精神神経医学講座医局に大学院生として入局した。秋元先生ご退官の3年前である。当時先生は精神医学研究の泰斗としてわが国の精神医学研究全般をリードされており、秋元先生に指導を受けることを誇りに思いながらの入局であった。この機会にありし日の先生のお姿を偲びつつ、先生のご業績を時系列的に辿らせていただく。

先生は北大、金沢大、東大と3つの大学で研究をされているが、最初の価値ある学問的業績は北海道の炭鉱爆発事故で生じた一酸化炭素中毒患者の示した失行症を「失行症」という一冊の本にまとめ、神経心理学に新たな視点を加えられたことである。次いで、てんかん研究を精力的に行い、とりわけアンモン角の機能を中心とする研究は世界的に有名であり、後にレノックス賞を受けている。また、多くのてんかん研究者を育てるとともに、てんかん学会、てんかん協会の発展にご尽力されて、てんかんの基礎研究、臨床研究を振興された。その他、特に精力を注がれた研究に、視床の神経生理学的研究、精神分裂病（統合失調症）の精神薬理学的研究などが挙げられる。その一方で、精神神経学会の理事長、日本精神衛生会理事長などを務められ、精神医学・医療の発展にも多くのご業績を残されている。

東大退官後に国立武蔵療養所の所長となり、退官される1977年までの10年間に精神医療の改革に大活躍されたが、その中で精神疾患のセンター構想を打ち出し、これが沖中重雄、江橋節郎先生らが提唱された神経難病、

発達障害センター構想と合体して、後の国立精神・神経センターの誕生に至った。また、わが国初ともいえるべき精神障害者作業所の設立に尽力され、この頃から精神障害者福祉への関心を高められ、その分野でのオピニオンリーダーとなられた。

国立武蔵療養所退官当時、既に73歳となっていた秋元先生は、船長を欠いて大海に漂流するがごときであった東京都立松沢病院を建て直すために強い要請を受けられ、院長に就任された。ここでも意欲的な大改革を断行され、4年間の間に新生松沢病院を誕生させ、将来の発展へのレールを敷かれた後、その地位を後任に譲られた。

それ以後、自由の立場になられてからは、著作、講演に大活躍され精神医学の歴史、現状の課題、将来あるべき像をわれわれに示し続けられた。著作の中での圧巻は96歳で執筆された「実践精神医学講座」である。実に1,000ページ以上にわたって精神医学の全般を深く解説されている。しかもほとんどの章がご自身の書下ろしである。その後も年平均2冊の割合で執筆され、亡くなられた2007年には3冊もの著書が出版されている。

一方、先生は講演も枚挙にいとまがないほどにされており、その数回は私自身も拝聴しているが、ご高齢にもかかわらず1時間以上の講演を立ったまままでされ、講演に使われるパワーポイントはすべてご自分で新たに作られるという、驚異的な頭脳と意欲の持ち主であった。

また、精神障害者に限りない愛情を注がれ、わが国の精神医療・福祉の施策の貧しさ、偏見誤解の不当さを鋭く指摘され続けた。福祉法人「ときわ会」の理事長にみずから就任され、親しく精神障害者の方々と交わりながら、精神障害福祉のあるべき姿を示し続けられた。また、

晩年は戦争が精神障害者にとって極度に悲惨な状況をもたらすことをご自分の体験から示され、平和の尊さを訴えておられた。

先生は年齢相応に体調を崩されることもあったが、いつも不死鳥のように立ち直り、講演活動を続けられるという様子を拝見して、私はいつしか先生は不死の存在と思うようになっていた。そして亡くなられた今でも、ふとまた甦られるのではないかという錯覚を覚える。

私個人の想いとして強く感じることは、私の精神科医師としてのこれまでの40年の生涯の間、絶えることなく先生のご薫陶を受けてきたことである。常に目指すべき理想像としての先生がいてくださった。とりわけ先生がその基礎を作られた国立精神・神経センターに私が総長

として就任した後の5年間には、何度となく先生のお宅にまでお邪魔し、センターの将来構想について多くの示唆をいただいたことは鮮明な思い出として残っている。

以上、感想を交えつつご業績の一環を辿ってきたが、先生のご業績は筆舌に尽くしがたいものであり、適切にご紹介できたとは思えない。また、先生の生前のお姿や、不肖の弟子としての私の思いをそれに相応しい文章にするには、能力の乏しい私にはできず、もどかしい気持ちで一杯である。心を込めて文章を書かせていただいたことをもって先生にお許しいただこうと思う。

最後に先生のご冥福をこころからお祈りして筆を擱く。

秋元波留夫先生ご略歴・業績

■ご略歴

- 1906 年 長野県長野市で生まれる
- 1925 年 旧制松本高等学校卒業、東京帝国大学医学部入学
- 1929 年 東京帝国大学医学部卒業、北海道帝国大学精神医学教室助手
- 1935 年 東京府立松沢病院医員、東京帝国大学医学部副手
- 1937 年 東京帝国大学医学部講師、外来医長
- 1941 年 金沢医科大学（現在金沢大学医学部）教授
- 1958 年 東京大学医学部教授
- 1966 年 東京大学退官、国立武蔵療養所（現在国立精神・神経センター）所長
- 1977 年 国立武蔵療養所退職、名誉所長
- 1979 年 東京都立松沢病院院長
- 1983 年 東京都立松沢病院退職

きょうされん（旧共同作業所全国連絡会）顧問、国立武蔵療養所名誉所長、金沢大学名誉教授、日本精神衛生会会長、日本精神保健政策学会会長、金沢医科大学客員教授、日本てんかん協会監事などを歴任。

主な著書に、異常と正常（東京大学出版会、1971、復刊2000）、作業療法の源流（金剛出版、1975）、心の病気と現代（東京大学出版会、1976）、てんかん制圧への行動計画（秋元波留夫編、日本てんかん協会、1986）、精神を病むということ（医学書院、1990）、精神医学逍遙（医学書院、1994）、精神障害者のリハビリテーションと福祉（調一興、藤井克徳と共編、中央法規、1999）、実践精神医学講義（日本文化科学社、2002）、精神医学遍歴の旅路（創造出版、2004）、などがある。